



[冒頭]

世界の歴史の主軸は『戦争』である。軍事力を用いてさまざまな思惑が交差する中で、政治目的を達成しようとし、人種・民族・宗教など、互いの理由や違いによって人間達は、自衛や利益の為に対立しあい傷付けあった。

戦争の勝敗によって異なる特徴とも言えるのは、戦いに勝利した事で、その暴力は正当化され正義であり、また敗北した事でその暴力は不当なものとして悪と観なされる事である。そんな法則に人類は、無意識に従うかのように争いを続けた。

特に世界が西暦20世紀を迎えた頃、この時代はまさに『戦争の世紀』と言っても過言ではない。故にその時代で起こったある二つの戦争は、大規模な死闘が繰り広げられた。

ただの小競り合いから世界規模にまで発展した『第一次世界大戦』。

ファシズム（恐怖政治）による一部の国の暴走を原因とした『第二次世界大戦』。

―――という『国家間の戦争』が主流であり、終結と同時に人類は多大なる反省を強いられた。

そこでさらに1世紀が起った21世紀初頭。新世紀を迎えてまもなく、ある一つの大事件・『911』をきっかけに、世界を分断した『冷戦』に続く、新しい戦争形態が誕生した。

反共から反テロ時代に移った世界に対して迎えられた新しい戦争。

それは『見えない脅威への戦争』である。

この物語はそんな時代を懸命に生き続ける少年達の物語である。

序章 その時少年は神の声を聞いた

「――はぁ……空……か」

学校の昼休み。一人屋上で漠然とため息をつきながら、空を見つめている少年がいた。

少年はどこにでもいそうなショートカットの幼気な中学生には変わりなく、なぜか寝ぼけた顔で空を見つめている。

気晴らしに空を見ているのではなく、しばらく風に当たって昼寝をしたいからでもない。

ただ空を見た事で、少年の脳裏に浮かぶのは、過去の惨劇によって一瞬で廃墟と化した景色と、後に聞こえてくる多くの断末魔の叫び声だった――。

2001年9月11日――。四機の旅客機がハイジャックされ、二機がニューヨークの世界貿易センタービルの二つの建物に相次いで激突し、ビルは炎上・倒壊した。

また別の一機は、ワシントン郊外の国防総省に突っ込み、残りの一機がピッツバーグ近郊に墜落した。

後にこの事件は、『アメリカ同時多発テロ・911』と呼ばれた。

世界貿易センタービルの崩壊によって大勢の人間の命が失われた日である。それと同時に、それを目の前で目撃したひとりの少年の人生をも変えた。

少年の名は『真堂李玖（しんどう・りく）』。父親を『911』で亡くして、今はその父親が入っていた保険金を頼りに生活している。

そんな重い過去を抱えながら、『真堂李玖』は今まで当たり前のように見ていた空をあまり見ようとはしない。

空を見たら、またあの惨劇がおこるのではないかと、心のどこかで思ってしまうのであった。

父親が亡なった事で『真堂李玖』の母親・『真堂優子』は鬱にかかり完治するまであまりまともに生活できないとされている。

姉と兄、自分を入れて三人で暮らしていたが、姉・真堂智美（しんどう・さとみ）は大学卒業後アメリカでジャーナリストの仕事をする為、出稼ぎに行ってしまう。

今は家族で頼れるのは兄である真堂陽一（しんどう・よういち）だけだった。

そして今に至る。

2004年4月8日。神奈川。片瀬。真堂李玖・12歳。

――最近は心の傷が癒える一途をたどり、普通に空を見上げる事が多く、屋上の金網によりかかりながら空を見上げる真堂。

「……」

未だに眠そうな顔で空を見つめる。

昼休みに食べるはずの弁当にも手を付けず、ただ空を見上げながらあの事件の事を思い起こしていた。

「どうした李玖……飯食わないのか？」

涼しげな表情ながらも心配して、横から問いかける少年がいる。それは真堂の幼なじみで唯一の理解者でもある崇妻獅郎（あがつましろ）だった。

今の状況から考えて見れば、まず昼休みには弁当と一緒に食べる友達。

真堂は一人だけ思い詰めていたせい、一緒に弁当を食べるはずの獅郎に気付かずにいた。

「早くしないと、食う時間なくなっちゃうぞ」

獅郎がいたことに気付いた真堂は、昼休みに一緒に弁当を食べる約束を忘れていた事に気がつく。

「……あ、ごめん獅郎……！ 居たの忘れてた」

口が滑ったのかその台詞を聞いて獅郎は――

「俺……、そんなに影薄いのか？」

――と、少し落ち込んだ様子で真堂に返した。

「……なんていうか――ちょっと考え事を、ね」

頭を掻きながら間を開けた言い訳する真堂。そのようすを見た獅郎は次のように問う。

「お前、まだあの事件の事引きずってんのか？」

さすがに長い付き合いのため、獅郎はあの事件（911）とその他もろもろの事は知り尽くしていた。

さっきは空を見上げていたので、真堂があの事件の事を考えていたのを悟ったのである。

「う……うん、未だにあの事件の事が忘れられなくてさ」

「立ち直れないってか」

「どうすれば……良いかな？」

この三年間どうにか忘れようとするが、それでもあの事件の情景が真堂の目に焼き付いて離れないでいる。

「そうだなあ、俺から言える事は――お前が悩んでいる間に、昼飯食う時間が五分もねえって事だな」

「――ほほう……へ！」

そのセリフを聞いた真堂はとっさに自分の腕時計を見て「っあ！」と、驚いた表情で授業まであと五分しかないことがわかった。

「もう弁当食べる時間ないじゃん！」

慌て弁当をかたづけ、真堂はさっきまで悩んでいたのが、嘘みたいに元気を取り戻した。

かたづけが終わった所で真堂は急いで自分の教室に向かった。

「―――着ついたあー」

なんとか授業までの時間にはついたが、後ろの席の獅郎から口元になにかの粘着性の音をたてる

。

「獅郎……その口に入ってんの……なに？」

真堂は「まさか」と思い、獅郎に問いかける。

「何って？ さっき食べた弁当だけど」

なにくわぬ顔で言った獅郎。

「早！ あの短時間でどうやって完食したってゆうの？」

真堂が疑問に思うのは無理もない、なぜなら真堂が屋上で獅郎の居た事に気付かずにいた時、獅郎は空腹に我慢する事ができず、先に弁当を食していたのである。

「なるほど、どうりで気付かないわけだ……。じゃあ、昼飯食ってないのって……俺だけ？」

今さらのように答える真堂。

「そうだな……」

そして真顔で答える獅郎。

授業が始まるチャイムと同時に、真堂の腹の虫も鳴った―――

授業が始まって三〇分が経過。

(腹へった～)

腹の虫を鳴らしながらも授業に取り組む真堂。朝食を取っていなかった為もあり、顔が少し青ざめていた。

空腹に絶える事によって真堂の時間感覚がずれ始めていた、まるで一秒が一分のように感じてしまい、集中力もちょっとずつ切れ始めている事に気が付く。

空腹の上に朝食まで取ってないとさすがの真堂でも目の前がボヤけてよく前が見えなくかった。

(朝食……食べてくればよかったかな……)

そう心の中で自業自得のように呟く真堂。授業にも集中できずにただエンピツ片手にノートを書く振りをしながら、時計を見て授業が終わるのを待っていた。

そして、四時間目の授業は終わった。

(終わったあ～)

爽快感あふれる言葉を心の中で呟く真堂。

(……って、まだ五時間目の授業があったんだ……)

爽快感に浸るのはいいが、五時間目の授業があることを思い出した真堂、この後、空腹の常態で授業をどう切り抜けるかを考えようとする。

「うう……」

「――李玖くん大丈夫？ 顔、真っ青だよ」

「ん？」

真堂の様子に気付いて声をかけた少女は、中学に入ってから最初に知り合った石川岬（いしかわみさき）である。

「ああ……石川さん。だ、大丈夫だよ……たぶん……」

下手な言い訳をする真堂。

「そんな事言たって……顔真っ青だよ。よかったら売店で買ったサンドイッチ食べる」

「マジで！」

石川の手渡すサンドイッチに目を光らす真堂。やはり持つべきものは友達だと、今になって感心する。

その後、石川にもらったサンドイッチを食べてから空腹がまぎれ、五時間目の授業になんとか取り組めた。

夕方。放課後。

下校時刻。一人で帰る仕度をする真堂。教室の窓の向こうに広がるグラウンド場から、陸上部の活動が見える。

「部活か……俺も入ろうかな……」

この時間だと普通の中学生は部活に行っているが、真堂の場合は帰宅部である。

「石川さんに……明日お礼しないとなあ……」

夕陽に照らされた教室に一人帰り仕度をしながら、真堂は石川に何の恩返しをするのかを考える。

「それにしても……この状況。夕陽に照らされる教室。放課後で一人帰る仕度をしている俺……ちょっと青春感じちゃー——」

今の状況を独りで真堂は語りだした瞬間——スパーン！と、勢いよく教室の戸を開ける音に真堂は、台詞を言う途中で思わず絶句してしまった。

「——う……な？」

「はああ～、こんちきしょ～」

鬱憤（うっぷん）混じりの吐息を漏らし、教室に入って来たのは緑色のジャージを着た女性。少しキツメな着衣な為に、知らずに豊満な胸が強調され、その上しなやかで優美な顔立ちと曲線をしていた。

そんな独特の美しさを持ちながらも、どこか男勝りな印象をしているのは、真堂の担任の教師で陸上部の顧問である杉山薫であった。

「うわっ！ か、薫先生？」

「下の名前で呼ぶな～」

教室の戸を開けた程度で全ての体力を使ったように、大きくため息を吐きながら体の周りに負のオーラを漂わせる。あまりの杉山の落ち込みように驚いた真堂。どうやら彼女は下の名前で呼ばれるのが嫌らしい。

「うう……ゲホッ！ ゲホッ！」

疲労で咳き込むと同じく機嫌が悪い杉山は、机の上に座り小さなため息を吐いた。

「一体どうしたっていうんですか？」

「ん？ いや……そのなんだ……ちょっとした寝不足だ、寝不足……ゲフッ！」

首を傾げながら睡眠不足だと杉山は答えるが、真堂はその言葉に少し違和感を覚えた。

「そうですか？ なんか咳き込んでいますけど……具合でも悪いんじゃないですか？」

重く咳き込んだところを見ると、あまり体調が優れない事を悟る真堂。見た目からして今にも倒れそうな杉山に、確認を取ろうとするが——

「ああ……そんな事より真堂、なんでおまえだけ帰ってないんだ。確か部活は入ってなかったよな？」

「いやあ……まだなに部に入るのか迷ってます」

余計なお節介を焼かれたくなかった為、プライドが高い杉山は真堂の気遣いを拒否した。

「そうか……真堂——」

「はい？」

真剣な眼差しで杉山は腕を組み、真堂を見つめながら次のように述べた。

「——おまえ人の心配よりも自分の心配したらどうだ」

「え？ 俺……なんかしましたっけ？」

「そうじゃない。ただ……おまえが三年前のあの事件の被害者って聞いたからよ……」

杉山の質問に真堂は驚きを隠せ無かった。なぜなら彼は小学校を卒業して以来、中学に入ってから自分がある事情で911の被害者だと、誰にも知られないようにしてきたからであったからだ

。

「なんで……その事を……！」

「いや……、おまえが通ってた小学校に友人が居て、そいつにちょっとおまえの事を聞いてな…
…」

「……」

911の事を知られたことで真堂は視線を下に向け、口を堅く閉ざした。そしてそのまま黙って杉山の話しを聞く。

「……私にとっては、あまり詮索するつもりはないだ。友人の話したとあの事件が原因で、かなりの仕打ちを受けたと聞いたからな」

真堂のトラウマは911だけではなく3年前。『あの事件』の後で日本に帰国してから起きた出来事とは何なのか、杉山は深入りはしていないが為に、あまり詳しくは知らないらしい。

「……」

真堂は沈黙を続ける。

「無駄な時間食ったな。その……、話したくなかったらいいんだ。野暮なこと聞いてすまかった」

「……」

自分だけ一方的に話した事に謝罪する。だがあまり不器用な言い方しかできない杉山は、教師として自分の生徒が抱える問題を少しでも取り除きたいはずなのに、逆に真堂を困らせてしまった。その為、黙り続ける真堂に対し不安を感じた杉山は、少々間を開けた喋り方をする。

「……いいんです……過ぎたことですから……」

いずれ知られるのは解っていても、真堂は精神的な脱力感を覚えた。杉山の視線を避けるかのように目を細めてうつむき、徐々に口数を減らす。

「そうか……、強いな真堂……」

言葉足らずで気休めな言い方しかできない杉山。これ以上、言葉を交せば不穏な空気が流れ込むだけで、他にいい方法は浮かばれずにいた。

「それに……」

不穏な空気のせいで、長く息が詰まるのを気にしたのか、真堂は窓を開けて教室内に新鮮な空気を送る。

「それになんだ！」

不意に言った真堂の台詞に、杉山はこの状況に『九死に一生を得た』かのように食い付いく。そして彼は次のように述べる。

「後ろで待たしている獅郎にも悪いですし」

「……え……？」

真堂が言った事で、杉山は背後から突き刺さるような視線が送られているのに気づく。

「——うおっ！」

「……」

真堂が見たその杉山の振り向き様は、まるで尾行されている事に気付いた女性のようにだった。

「あが……つま……」

「なにやってんだよ……」

獅郎の冷たい視線に少し動揺している杉山。

「なにして、相談事だよ……」

「ふ～ん」

さっきまで何も無かったかのように、獅郎は妙に落ち着いて話す。

「っていうか、おまえ……いつからそこにいた」

先に帰ったと思われた獅郎が、なぜまだ学校に居るのか杉山は問う。

「いつからって？ ……あんたが教室に入って来た時からずっとだけど」

「えっ！ じゃあさっき話していた事も、か？」

あんた呼ばわりする獅郎に構わず、さっきから真堂と話していた事が、全部見られていたことに驚く杉山。

「おう……なあ」

「あ？」

さっきから挑戦的な態度をとる獅郎に、杉山は少しずつ機嫌が悪くなり眉間にシワを寄せながら話を聞く。

「さっきから聞いていると、大の教師が相談している生徒の心の傷広げてどうするんだよ」

「——うっ！」

(獅郎は直球だな～)

獅郎の正論が心臓に突き刺ささった感覚を覚えた杉山。

一方二人の会話の様子を見ているだけの真堂は、獅郎の直球な言葉に疑問を少し呟いた。

「あんたあれだろ。人のカサブタ絶対はがすタイプだろ！」

「そ……れは……う、うるせーおまえには関係ないだろ！」

(あたっているんだ……)

呆れた表情でさらに呟く真堂。

「うう……おまえ、さっきから聞いてると、「あんたあんた」って、先生と呼べ先生と！」

真堂が居るにも関わらず、当然の反論をする杉山は獅郎との口論を続ける。

「俺が言いたいのはよ、人に聞かれたくない話しをされてるほど李玖はそんなに心は広かねえって事だ」

「なっ……！」

「し、獅郎！」

獅郎の直球の発言に杉山思わず絶句してしまった。

そのことで真堂は、これ以上獅郎がよけいなこと言わないように口を挟んだ

「し、真堂……？」

「いや……あの、か、帰ります！」

「おおい！」

言い訳のしようがないと判断した真堂は、とっさに獅郎の腕を掴み、全速力で教室から出ていった。

「早！」

あの口論の後、二人が急に帰った為か後味の悪い静けさを孕む。教室内はまだ夕陽が射している、喋る間はそんなに時間は一時間もも起っていなかった。

「行ったか……、はあ～、あたしってどうしてこう……」

杉山は自分のうつ向きそうな頭を支えながら、あまり慣れない事をしたせいで、慰めるつもりが逆に真堂を困らせてしまった事を悔やみにに悔やみ、またむせた。

一方。真堂は獅郎を連れて校門を通り過ぎた後、全速力で走ったのでかなりの体力を使ってしまった。そのせいか自分が学校の行き帰りの道を通っていた。

「はあーはあー……獅郎う」

真堂は獅郎を引っ張ってきた疲労で声が荒々しくなる。

「ん？」

さっきまでの口論がなかったかのように振る舞う獅郎に、愕然とした真堂は道の真ん中で膝をつく。

「「ん？」っじゃないでしょ……が、なんだよ——あれ……」

真堂は再び立ち上がり両手で膝を支えながら、疲労が混じった言葉で獅郎に問う。

「あれって？」

「とぼけるなって！ 先生の態度といい、あのストレートな物言いはなんだよ！」

獅郎が言ったお節介がすぎる発言に、意義を唱える真堂だが「ああ、あれか」と、全く聞き入れる様子が見られずにいた。

「でも本当の事だろ？」

「それで——も、あの言い方はまずいって……」

「おお……わかった……」

なにか物足りなそうに了承する獅郎。

そんな真堂は喋る事もままならず、疲労が重なり続けると同時に両手で膝を支えることすらできなくなってしまい、背中に持たれゆっくりと呼吸を整える。

「……なあ」

「え……なに？」

「……あれ」

道の端っこでバテる真堂を見て、獅郎は他に休める場所はないか探そうと周囲は見回すと、ある最適な建物を見つけ問うた。

「ああ、獅郎は初めて見るっけ」

「なんなんだ。あの教会」

「確か五十年前……日本がまだ『高度成長期』の頃に建てられたって聞くけど、そこまで詳しい事は知らない」

「へえ～戦後に……『三種の神器の頃』ねえ……」

真堂が教会について話したところ、獅郎はあの教会が戦後間もなくして建てられた事を理解した。そして呆れたような口調で、その時代にできた三種類の家電製品の名称を口にした。

「よっこいしょとっ——」

獅郎は自分の肩に真堂の片腕を組ませた。

「あん中には誰かいるのか？」

「ううん誰も。何年か前に教会には、神父さんが一人居たらしけど、三年前に亡くなっらしい

」

「三年前って、あの事件が起こった年か」

三年前に教会いた神父とは、よく町のボランティア活動に参加し、毎日教会の掃除を日課としていた人道心の深いキリスト教の信者であると真堂は言う。そのことで獅郎はその偶然の重なりによって、どこか不吉な気配を感じた。

「うん、その年に父さ——」

『た……すけ——お……ま——そ……い——』

教会の敷地内に踏み入れた瞬間、雑音混じりに聞こえた声が真堂の頭の中をよぎった。

「——んの葬式……に」

「ん、どした？」

疲労のせいで喋れないのか、それを心配するかのようには獅郎は涼しげな顔を横に向け真堂に問うた。

「……いや、父さんの葬式にも出てたかなって」

「ふ～ん」

「獅郎……」

「ん？」

「さっき……何か言わなかった」

「いやなんも？」

「……そう……」

訪ねられた獅郎にはあの声は聞こえてないらしい。ただ、自分から言っておかしく思われてしまうかと考えた真堂は、そのまま獅郎の肩に捕まったまま、教会の中に入っていった。

「――ほっほお〜」

二人が見た光景は左右の床に並べてある横長椅子と、前方中央に置かれている古びた十字架に貼り付けにされたイエス・キリストの像の光景に二人は感心したあまり、言葉では現せないほどの印象を感じた。

「へえ〜、以外と広いんだ」

「なんか……一見古そうに見えて、人がいないわりにはかなり手入れされているみたいだな」

「ああそっか、ここらへん一帯の近所は、ボランティアで周りに三回ぐらいに掃除に来てくれる人がいるから、たぶんそれでキレイに手入れされているんだよ」

そう言いながら真堂は教会の左に並んである一番前の横長椅子に腰かける。座ったところは、イエスの像の目の前である。

「なんか喉乾いたなあ……季玖、ここの近くに自販機とかないのか？」

喉の乾きは真堂も同じこと、気を使うように獅郎は問うた。

「ん？ えーと……ここを出て左に曲がった後に右に曲がった所に駄菓子屋さんのすぐそばにあると思う」

「駄菓子屋？」

「うん。たぶんその駄菓子屋さんの横にあったと思ったんだけど、獅郎はここの地元じゃないから、案内しようか？」

地元(片瀬)在住ではない獅郎はこの地区の事はあまり知らない為か、道を言ったところでわかるのかが真堂には心配だった。

『――き……さ……き……？』

「――っぐ」

「いいよ、一人で行けるから、おまえはそこで体でも休んでろ」

「……う、うんわかった」

獅郎の言った事に少し心強く感じたと同時に、頭の中から聞こえてくる声に真堂は遅れて言葉を返す。

「え〜と……『アク○リアス』だっけ」

「頼むよ」

そこまで気を使う必要はないのにと言いたいところだったが、ここは一つ獅郎の心遣いに甘えようとする真堂。横長椅子に座ったまま教会の外から出る涼しげな顔をする親友の背中を見送った。

。

序章パート9 『神の声』

数分後。

「——大丈夫かなあ、獅郎……まあ近いからいいけど……遅い」

教会から駄菓子屋から徒歩二分。獅郎が出て行ってから最低十分ぐらいはかかっていた。

「そんなに……遠いところじゃないけどな……」

横長椅子に腰かけたまま姿勢を少し変え、後ろを向いてドアのほうを見ても獅郎が戻ってくる心配はなく、真堂は姿勢を戻してため息をついた。

「はあ～、やっぱ無理があったかなあ」

真堂は親友のある欠点を見落としていた。それは馴染みのない道だけ獅郎は方向オンチだということである。

(まさか、あんなに近くの所にもたどり着けてないとは、とほほ……あと何時間待てばいいんだろうか……)

まるで全てを悟ったかのような口ぶりで、真堂は心のなかで呟やいた。

「しょうがないな」

いつまで待っても来ない獅郎を探しに行こうと、横長椅子に席をたとうとしたその瞬間——

『そ……ふ……い……』

「——っぐ！」

声は突然真堂の頭の中に響いたと同じく頭からとてつもない激痛が走った。

『た——のむ——たった——ひとりの——』

「っぐ！……あ——がはっ！」

まるで脳髄に直接、裁縫針（さいほうばり）でも刺されたかのように、真堂はあまりの激痛に倒れ込む。

雑音混じりで聞こえてくる声も聞こえてくる度に、はっきりとした言葉になり真堂の脳髄に激痛が走りながら悶える。

『い——もう——と——なん——だ——』

「い——やめろう……」

教会の敷地内に入った時から、最初に聞こえてきたあの弱々しい声では、少しの痛みしか感じなかった。だが今の現状からだと、聞こえてくればくるほど痛みが増してくる一方で、真堂は今にも破裂しそうな頭を必死に押さえる。

「がっ！——んぐっ……」

『じゃあ……おまえが……』

「や……めろ……やめろ！」

それでも頭痛は収まらず、真堂の頭には血管が浮き始め、心臓の鼓動と同じ拍子で激痛が走り続ける。

『そふいを……おれは……にん……げんじ……や——ないから……』

「いっ……たい、なにがあ——なに……がっ！」

この声の主が誰なのかは真堂には分からない。

ただ最初は弱々しく聞こえる声でも、やがて少しずつはっきりとその声が聞こえてくる。頭痛が続いたせいか真堂にある現状が起きている事に気付いた。

「なんだっ、なんだよこれっ——」

苦しんでいる中で真堂はかなり驚いた。なぜならあまりの激痛が悪化し続ける為、死に直面してもいないのに走馬灯を見始めていたのである。

「これは——俺！」

まるで幼い頃のホームビデオを見ているかのように、今まで生きてきた十三年間の記憶が真堂の頭の中へと叩き込まれてゆく。

「うっ！——」

一瞬だけ身体中から衝撃が走った。同時に今まで生きてきた中で最悪な情景が写しだされた——

—

それは、なんの変わりもない群青色の空――ひとりの少年はただ空を見上げていた。

上空から見える一本の白線状の雲が少年の目に止まった。

その白線状の雲はだんだん太くなり、少年は目を細めながら視線を先に向ける。

するとやがてその線が飛行機雲だと気付く。

周りの様子がおかしい事にも関わらず、不思議と太くなるあの飛行機雲に少年はただ夢中である。

しばらくして飛行機雲は、少年の目の前にあるとても大きな建造物に近づいていった。

そして状況の急な変化に気づき、上空から地上へと視線を落としたその瞬間――

頭上から振動が体の内側に伝わるほどの、とてつもない轟音が響く。

飛行機が建物に墜落した音だった。

瞬く間に建物は炎上し、最も危険な状況に動じず、少年はその場所から一步も動かずにいた。

突然のことでなにが起こったのか理解できず、混乱し始めていたのだ。

人が大波のように逃げまどい、危機を悟ったと同時に巨大な影が少年と何百何千という人々を覆った。

大きな土埃が濃く広がったことで、日の光は一時的に完全に遮られ、常闇が生まれる。

少年は一定の闇にさ迷い続ける。

そのことで恐怖のどん底まで追い詰められ状態で、しばらくすると一筋の光が差し込んできた。

「やめろ……こんなもの見たくない！ やめろ――」

危機は過ぎ去ったと思えた少年は、その光のえと駆け寄り、導かれるように必死に向かうが――

「———イヤメロオオオー！」

その光の向こうにみえた光景が、新世紀の最初で最大の事件の全貌が、まるで魂までも八つ裂きにされるかの如く、少年・真堂李玖に精神的苦痛を与えた。

「李玖！」

豪快な扉の開け方によっては真堂に叫びに気づき、救いの手を差しのべるかのように獅郎が現れた。

「李玖！ 李玖！ おいしっかりしろ！」

倒れ込んだ真堂を抱えある獅郎。

「し……ろう……」

「すまん遅くなった。普通に道歩いてたら迷った」

獅郎が現われたことで、真堂の頭痛や幻覚が嘘のように消えていた。

「結局迷ったんだ……」

この時、真堂に起こった現象があ的事件に次ぐ、自分の人生を大きく一変させる事だとは知らずに彼らは教会から出ていった。

少年に福音は授けられた

第一話パート1・『異変』

第一話 解かれた封印と試練の始まり

「はぁ……——」

2004年4月15日。木曜日

あれから一週間。真堂はあの頭痛以来、ある事に悩んでいた。

『あ～だるいわ～』

「う……っ！」

『杉山先生、今日もいい乳だったな～』

「うう……」

『そうだ、今日『月刊エレメンタル』の発売日だ！』

「ううう……」

昼休み。一年三組の教室の窓越しから薄い曇り空をしばらく見てから、悩める少年は自分の周りにいる人間を見回し、低い唸り声を漏らしていた。その理由は、ある奇妙な出来事によって引き起こされた。

最初はただの軽い頭痛で気にもしなかった。だが完治したと同時に奇妙なことが起こる。それは、少年・真堂李玖が一週間前に体験した事と少し似ていた。

唐突に脳裏から人の声が聞こえ、視線の会った人とすれ違った人に限定されるが、それが人の思考だとは思ってもよらなかった(強く思った事に限定する)。

なぜ真堂がこのような能力に目覚めたのかは分からない。ただ一番気がかりなのは一週間前にあの『教会』で起こった事だった。

あれから獅郎に担がれて家に帰った真堂。帰宅後、兄に心配をかけてしまった事で罪悪を感じていたが、そんな事はお構いなしに兄・陽一に看病された。翌日、学校に登校して能力に目覚めた事に気が始め、今に至るのであった。

「はぁ……どうしよっかな～。相談しようにも獅郎はいないし……」

一週間前に獅郎が風邪で学校を休んでいた為、他の人に相談しようにもあまりこう言った相談は気持ち悪がれるか、『電波系』あるいは『中二病』と診なされるのが落ちだと思った。そのことで真堂は、人に相談するのはなるべく避けた。ちなみにこの時、杉山も風邪で休んでいた。

「……っあ！ おはよう獅郎」

だが気まぐれな人間なのか、昼休みに登校してきた獅郎。

「おう……おはよう」

獅郎は相変わらず無愛想な態度で、遅れて朝の挨拶を交した。

「どうしてたの？ 風邪？」

「まあな……」

「ふ～ん……。あのさ獅郎……」

「ん～？」

真堂は顔に似合わない薄い微笑を浮かべながら、獅郎にさっそく能力について相談しようと

した。

「なんか俺……『超能力』に目覚めちゃったみたいでさ……」

「ほう……どんな能力？」

いいリアクションはあまり期待してはいなかったが、意外とその言葉を受け取める獅郎。そして珍しく興味がありそうな問いに、真堂は話しを進めた。

「……人の考えている事が分かる能力なんだけど……」

「『読心術』ってやつか……？」

「そう！ そんなところ！」

少しばかりか真堂は驚く。獅郎についてはもうすぐ思春期を迎えてもおかしくない年頃のはずが、彼は少年特有の好奇心に大きく欠ける部分がある。

その為、こう言ったSF染みた話しは、あまり興味は無いと決め付けていた。だがむしろ獅郎の家柄上、異能関連の知識は豊富だと思い真堂は次のように問う。

「……獅郎もしかして、意外と詳しいほう？」

この一週間ただ謎の能力に踊らされていたわけではなく、上手く操る為にはかなり骨を折っていた。その結果、私生活や学業に支障がない程度に、真堂はなんとか能力を抑制できていた。主に抑える方法としては、ドラッグストアに販売してある、粉末状の睡眠薬あるいは痛み止めといった少量の物で対処している。

第一話パート2・『複雑な心境』

「いや、おれの家に似たような奴がいたからよ……」

窓に視線を向けた獅郎は、遠い目をしながら冷静な発言をする。

「似たような人？ それって……お母さ——」

「おい……！」

「あっ……ごめん……」

獅郎の母親について訪ねようとしたところ、普段から寝ぼけた目つきといっても、自分の主な素性に関して詮索されると、彼の眼差しは鋭くなり、真堂を睨みつけるのであった。

獅郎の家は代々女性が当主になり、平安時代から続く由緒ある特殊な家系であった。明治初期に財閥を立ち上げて以来、本社は京都に置いてあり、今も変わらず多くの富を得ている。そんな名家の令息である獅郎だが、親とはあまり上手くいってなく、今は親戚に引き取られていた。

そんな獅郎の複雑な理由を真堂は半分（あるいはそれ以下）しか知らないでいた。いわば彼が言った事は、親との関係が悪い獅郎にとって傷口に塩を塗り付けるようなものだった。

「ほんとごめん」

「まあいいよ……。親子関係に触られて神経質になる俺もわりいし……」

「獅郎……」

真堂の無礼を獅郎は許し、複雑な事情で親と離れて暮らしている彼にとっては、あまり盛り上がれない話題だという事に、真堂は理解した。

「……話しは戻るが……なんだ、『超能力』だっけ……？」

「はい……」

「——あたしもちよっと聞いていいかな」

獅郎が話しの本題に切り替えようとした矢先、横から一人の少女が口を挟んで来た。

「？×2」

真堂達は声をかけられた方へ視線を向けた。

すると一見真面目そうな面持ちをし、後ろ髪を二つにまとめているその少女は、真堂と同じクラスの『石川岬』だった。

「石川さん？ 聞きたいことって」

「二人はその……『ホモ』なんですか……」

「は？×2」

明らかに勇気をふり絞ったような発言に、真堂と獅郎は同時に啞然とした。

「何故に……ホモ？」

啞然しているとはいえ、石川の発言のせいで少し力が抜け、真堂の返す言葉が弱々しく聞こえた。

「その、違うのよ——」

やっぱり言わなきゃよかったと言いたげな態度で、石川は真堂の視線を痛く感じながら両手で赤面した顔を隠す。

「……………だれ？」

石川とは面識がなかった獅郎は、啞然とせずただキョトンとしながら二人の会話を見ていた。

「獅郎は会ったことはないっけ？」

「……どうも初めまして、石川岬です」

「よろしく……」

石川が挨拶を交したところで、真堂は突然の発言について問う。

「それで……ホモっていったい」

「いや……その……なんかいつも一緒にいるから……かな？」

「あ～なるほどそういうことか」

真堂はその一言で全てを悟った。要するにいつも同じ男の友達と一緒にいる事によって、他者から見た印象だと『そっち系』の人と思われるのは、当然のように誤解されやすい結果だった。

「ちがうちがう、まったくそういうのじゃないから」

「そう……なの？」

『そうだよね、やっぱ聞くのはよそう』

「ん？」

真堂は石川の質問にどことなく違和感を感じた矢先に、少し石川の心の声が聞こえた。どうやらさっきの用事とは、どこか違うことを訪ねようとしていたらしい。

能力といっても相手の『心の中』を読んでも、あまりいい気分ではない為もあり、真堂はそこまで頻繁に能力を使えるわけではなかった。

どうでもいい誤解が解けたところで、石川はクラス委員の仕事があった為、真堂達を後にしてその場を去った。

「……悪い人じゃないのは確かなんだけど」

「どんなやつなんだ？」

頭を傾け、石川をどういう人間なのかを少し考え始めた真堂。

「どんな……人のかって言うと、入学式に校舎があんまり広くて、どこに自分のクラスがあるのか分からなくてさ。その時、石川さんが親戚にクラスを教えてくれたんだよ」

「ふ～ん」

「それでね——」

しばらく真堂は石川について話した後、授業が始まるチャイムが鳴った。

第一話パート3・『午後の安眠と起床』

夕方。放課後。

時刻は午後3時を過ぎようとしていた。

「……獅郎」

「……」

「し～ろう……」

「ん……ああ？」

学校の放課後。真堂は午後の授業からHRえと、ぶっ続けで寝ていた獅郎を起こそうとしている

。「もう授業は終わったよ——っていかもう放課後！」

「ええ……何がぁ……」

起きたはいいが獅郎はまだ寝ぼけていた。

「もう帰る時間だから一緒に帰ろうよ」

呆れた顔で獅郎に問いかける真堂。

「んあ？ ふああ～……ごめん、先に帰ってて」

獅郎はあくびをしながら真堂の誘いを断る。眠気混じりな言葉で「もうちょっと寝かせてくれえ……」と言って、再び寝込んでしまった。

「わかった……——寝不足だったのかな……？」

「ん～……」

気を使うように真堂は鞆（かばん）を腕にかけ、静かに教室を去った。

二時間後——。

「Z Z Z zzz……」

部活動が終わる頃になっても、窓から薄暗く照らされた夕日の光が差し込む教室に相変わらず獅郎は熟睡している。

「Z Z Z zzz……」

そんな時、安眠中の獅郎から近づこうする少女がいた。

「……あ……あの～」

少女は獅郎に声をかけ、手を差しのべようとしながら何か困った表情でいる。

「あの～」

「Z Z Z zzz……」

「もしも～し」

「Z Z Z zzz……」

「お～い」

「Z Z Z zzz……」

(……起きない)

少女がなんと声をかけても獅郎は起きない。だが諦めずに何か奥の手を使おうとしていた。

それは――

「……お客さん終電ですよ」

「――なに！」

「ひい！ お、起きた……！」

「ん？」

「ど……どうも」

なんともベタな方法で、完全に眼を覚ました獅郎は、瞬時に立ち上がり、目の前いる少女を観察するかのようになら下まで見た。その後、一度だけ面積がる少女だったので名前を思い出そうとしていた。

「あ～確か、いし……石……」

「あの――」

「あーちょっと待って今思い出すから」

「はあ……」

「いし……石……山！」

「川です……」

やっと名前を思い出したが、半分しか当たってないという結果に、石川岬は少し呆れた表情でため息ついた。

「んで、なんか用」

「ああ……り……李玖くんの事についてなんだけど――」

「ホモじゃねえぞ」

「いや、それはもうどうでもいいとして――崇妻くん」

「ん？」

石川は何か覚悟を決めた眼差しで、獅郎にある事を問いかけた。

「李玖くんが、あの911の被害者だって本当？」

「……ちっ」

獅郎は舌打ちをして、石川の視線を反らしてから、椅子に倒れ込むように座る。そこで目を閉じながら考え込んだ。

「……えっ、あ、あの――」

獅郎の急な態度の変化に、少し驚いた石川は慎重に接する。

「杉山に聞いたのか？」

「あ……はい」

ちょっとした情報の漏れに心当たりがあった獅郎は、どうゆう事情で石川が知ったのか問う。

「俺にそんなこと聞いて、どうするつもりだ？」

「ただの好奇心や興味本意で聞ける話しじゃないってことはわかってる。ただ……」

「――同情か？ ならよしとけ、あいつにとっちゃただの一人善がりにはしか聞こえないぞ」

石川は真堂の背負ってる物を少しでも軽くしようと、友人としての思いやりのつもりだったが、それはすぐに獅郎に否定された。

「そんな言い方――」

「事実だ」

「うっ……うう……」

冷たい視線を石川に向ける獅郎。彼の本意は自らの友について、あまり詮索されたくないのであって、単に不謹慎な言い方をしている訳ではなかった。

「じゃあ……、崇妻くんはどうしてそんな李玖くんと一緒にいるの？」

「そうだなあ……、あいつは李玖はあの事件の後に日本に帰国して以来。小学生だったあいつは精神的にボロボロだったからな、滅多にない『テロ』とやらを体験して生き残ったんだ。学校じゃ一躍有名人になってな、あの事件から興味本意で聞いてくる奴が多くてよ。それについて反発した李玖は、しばらくいじめられるようになった」

獅郎が話だした内容は、とてもいい思いでとは言えない。だがすでに過ぎた事だったので口調が少し穏やかだった。

「それ知ってる！ 確か杉山先生によれば、李玖くんはあの事件からかなりの仕打ちをうけたって」

「ああ、そうだ……」

「助けようとは……しなかったの？」

「ん～……めんどくさかったから助けなかった」

「ええーっ！」

獅郎の思わぬ発言に石川は驚きを隠し切れず、ただ啞然とするしかなかった。

「なにそのアバウトな理由！」

「いや助けなかったってよりも、武力介入ぐらいはしたつもりだけどな」

真顔から発せられた、ふざけたような話しの内容に、腹を立てた石川は「意味わかんない！ っていうか助けたんじゃない！」と、怒鳴って獅郎に反論する。

「いんや、あれは俺の一方的な気持ちでやったことだから、助けたのには入らないと思うが」

「じゃあ自分で助太刀したとは思ってないんだね……」

この口論に終止を打つかの如く、言い放った後に無理やり閉めた石川。

「おう」

素直に応じる獅郎。

そして石川は話しを本題に戻そうとする。

「もう……。話しは戻るけど、獅郎くんは何でいじめられてる李玖くんをほっといたりしたの？」

「はあー……。そんなにあいつとお近づきになりたいかねえ……。まあいいか。あいつがいじめられているのをどうして黙ってたかって、それは李玖自身が助けを求めてなかったからだ」

「というと？」

珍しくだんだん口数が増えてきた獅郎は、いじめの事について理由を話したが、石川はその理由に疑問を抱いた。

「正確には一度助けた事はあるんだけどよ。あいつは俺をいじめから巻き込まない為に、わざと助けを求めなかったんだ」

涼しげな顔から真剣な顔へと切り替わった獅郎を見て、石川は（そんなことがあったんだ）と、心の中で優しさが含んだ呟き方をする。

「じゃあ、もう一度聞くようだけど。崇妻くんはどうして李玖くんと一緒にいるの？」

「そうだな……。まあ、あいつといるとあんまり退屈しないからかな～」

うつむきながら表立っては出さないが、少し恥ずかし気な言い方で、獅郎は教室の黒板の上にある時計に視線を向ける。

「やべっ、もうこんな時間か」

「へ？」

同じく石川も時計に視線を向け、時刻は午後6時をまわっていた。

「あっ、ほんとだ」

「なあ……。あんた」

「はい？」

振り向き様に自分が呼ばれていることに気づいた石川は、何かを告げようとしている獅郎に少し緊張した。

「よかったら、あいつの過去についてあんまり詮索しないでくれねえかな」

積極的に聞きすぎたせいか、その告げられたことを聞いて、逆に自分の人間性を下げてしまった石川は、かなりの羞恥心を覚えた。

「……。あ……。ごめんなさい」

頭を下げて獅郎に謝罪する石川。

「まあいいけどさ……」

獅郎は呆れ気味な言い方をし、後に教材が入った鞆を背中にしょって、教室の出口に向かう。その途中に石川の左横に通り過ぎ、教室の出口の前で獅郎はある事を問うた。

「……。見た目は平気な顔してるけど、実際あいつの目にはあの事件の光景が焼き付いてる……。だから俺はあいつのよき理解者——いや、親友として俺はあいつを守りてえんだ」

「崇妻くん。どうして……。そこまで李玖くんことを？」

「立場が一緒だったからからかな……」

「たちば？」

「そうだ。失いたくない物を失ってから、いつも孤独で一人ぼっちという、そんな立場がな——」

「そうなんだ」

振り向き様に言ったその言葉で、石川は李玖と獅郎の関係が改めて理解できた。同時に李玖の過去について調べがついたので石川はどことなく満足気な笑みを浮かばせた。

「まっ、そういうことだ。じゃな」

夕日の光を浴びつつ、獅郎は教室から立ち去り自分の家に帰って行った。

真堂の自宅。夜。

夕飯を食べた後、自分の部屋ベッドに横たわり、青い天井を見ながら真堂は自分の能力について考え始めた。

(いったいこの能力はなんなんだ?)

青い天井に手をかざし、真堂は自分の手の甲にある傷跡を見つめる。それは昔、小学生の頃にいじめでできたもので、完治しても未だ消えずにいた。

真堂がこの状況で、能力について考え込むことには理由があった。それは、やっと思いで操れるようになった超能力(読心術)が突然、使えなくなっていたのだ。

(兄さんに相談しようにも、信じてくれるかどうか分からないしな～。というよりいつの間にか使えなくなってるし……)

兄に相談する前に真堂は弱気になり始める。なにせ証拠となる能力が突然のように消えてしまい、今は元も子もなかった。そして再び能力を目覚めさせる為、二度と行くまいと決めた『謎の教会』に行くか、真堂は迷っていた。

「うう……あそこもなんなんだろう。……ん！　そういえば『あの人』だったらなにか知っているかな？」

教会に行くか行かないかを考えていた途中、真堂は能力について相談する人に心当たりがあった。

3年前に911で恋人を亡くし、日本文化に惚れ込み日本に引越してきて、今は真堂の家の隣に住んでいる人物。崇妻獅郎と兄と同じく信頼できるアメリカ人女性。クレア=レイルフォードに、真堂は相談しようとしていた。

クレア=レイルフォードの自宅玄関前――

夜中の8時。真堂は扉の前に優しくノックし、家主が出てくるのを待つ。

「すみませーん……。やっぱ遅くに悪かったかな」

「ハイ、今行キマス」

扉の向こうに聞こえ、独特ななまりが効いた一声で真堂は少し安心した。

「オ待タセシマシタ。李玖サン」

扉を開けた人物はブラウンの天然パーマな髪型と、おっとりとした眼差しをしている。クレア=レイルフォード本人であった。

クレアは客人の顔を見た瞬間、笑みを浮かべながら真堂を歓迎した。

「こんにちはクレアさん。今日は相談事があってきたんですが……」

「オウ、私ニ相談デスカ？　分カリマシタ。トリアエズソンナ所にイナイデ家ニ入ッテクダサイ」

「そうですか……じゃあ、お言葉に甘えて……」

クレアのテンションの高さに若干引き気味でいながら、真堂は家に入った。

© 2008 Pearson Education, Inc. All rights reserved. Printed in the United States of America. This publication is protected by copyright. Any unauthorized use or distribution of this work is illegal.

第一話パート6・『同じ境遇の隣人』

家の外から客間へと真堂を移動させた後、クレアはキッチンにある買ったばかりの紅茶を二人で飲みながら相談に移ろうとしていた。

「それで相談したい事なんですけど――」

客間に移動してからしばらくした後、さっそく本題に切り替えた真堂。クレアにこの一週間、自分があの教会に行って奇妙な事が起こった事と、超能力に目覚めた事を話した。

「教会ニ入ッテカラ聞コエテクル謎ノ声ト超能力デスカ……」

「はい……」

不安混じりに応じる真堂。

「……超能力ノ方ハカニハデキマセンガ。教会ノ事ニツイテハ知ッテマス。オソラク李玖サンノ言ッテイルノハ『願いが叶う教会』ノ事デショウ」

「願いが叶う教会……ですか？」

「ソウデス、私ガココニ引越シタバカリノ頃、真堂サンガ言ッテタ教会ニ祈リヲ捧ゲルト願イガ叶ウトイウ噂ガ広マッタ事ガアリマス。私シノ場合ハ、タダ小耳ニ挟ンダダケデ余リ詳シクハ知りマセン」

クレアが言うように、その願いが叶うという現象は、実際に叶うのではなくほとんどが偶然の産物に過ぎなかった。

「そうですか……」

クレアに相談した事で教会について新たな謎が増えた。それにより、あの教会の真実へと遠のいたようで真堂は頭を抱え、虚ろな目をしながらうつむいた。

「李玖サン……？」

「……は！ あ、ありがとうございますクレアさん。おかげで教会の事について少しわかった気がします」

「オウ、ソウデスカ、オカニナレテヨカッタデス」

クレアは嬉しそうに両手を合わせながら応じ、真堂に茶菓子(クッキー)をごちそうした。

「ハァ……モウアレカラ3年ガ起ツンデスネ」

「え？」

茶菓子を食べている真堂の様子を見ながら、クレアが持ち込んだ話しは911の事だった。

「ああ……そうですね」

突然言った話しの内容に、真堂はどう応じれば良いのか困っていた。

「李玖サンガ父親ヲ亡クシタヨウニ、私モアノ911デ恋人ヲ亡クシマシタ」

「確か……ジェームズさんでしたっけ」

ここはとにかく真堂はクレアの話しに合わせる事に決めた。

「イエス。ココニ引越シテカラ去年、李玖サンノオ兄サンガ学校ノ都合デ2、3日私ニ預ケタ時ガアリマシタヨネ。ソノ当日、私ハマダ『ジェームズ』ノ死ヲ未ダニ受け入レラレズ、隠レテ泣イテイタ日々ガ続イテイタ頃デシタ。ソナナ時、李玖サンノオカゲデ私ハ立ち直レルコトガデキマシタ」

3年前。ジェームズ＝カーターというクレアの婚約者が911で亡くし、父親が精神的療養をする為、日本文化に惚れこんでいた娘を日本に引っ越させた。それでも恋人の死を受け入れられずにいたそんな時、真堂がクレアにある言葉をかけた事で立ち直れることができた。

『自分が言えた義理じゃないと思うんですけど、その人が死んだとしてもまだその人は、あなたの心の中に生きてると思うんです』

クレアの脳裏から浮かび出されたその言葉は、2年前に孤独を感じて泣き崩れていたクレアを慰める為、真堂が同じ境遇の人に対して口にした言葉であった。

「ああ……あの時……」

「デスカラ真堂サン。私ニカニナレルコトガアツタラ、ナンデモ言ッテクダサイ」

「クレアさん……」

真堂はクレアというもう一つの心強い仲間を増えたと同時に、今度あの謎の声が聞こえる教会に行くことを決意した。

「もう遅いんで、このくらいで帰らしてもらいます」

「オウ、ソウデスガ？ モウチョット話シタカッタノデスガ」

「すみません」

真堂は明日の学校に備え、クレアに相談にのってくれたお礼をした後、自分の家に帰っていった。

だがその矢先――

「ん？」

クレアの自宅から出た直後、突然、ポケットに入っている真堂の携帯電話が、マナーモードで震えだした。

「なんだろう？」

真堂は二つ折りの携帯電話を開けて、画面を見たらメールが受信されていた。

「……なっ！ また……このメール」

そのメールの内容を見た瞬間、真堂は慌てた様子で家を後にし、どこかへ移動した。

第一話パート7・『告げられた真実』

「ここか……」

薄暗い見知らぬ立体駐車場。家を後にした真堂はこの場所に着いてから、あることを考え始めた。

一週間前。真堂の携帯電話から何度か届いた、謎のメールがことの発端だった。

アドレスは見知らぬもので、そのメール内容自体は三つある。一つ目は「君はこの世に神が居ることを信じていますか？」と、なにかのいたずらだと思い無視した。だが二つ目のメールは「不老不死になりたいと思ったことはあるかい？」と、次第に意味不明な内容に仕上がっていた為、真堂は少しだけ気になり始める。そして三つ目の今日は「君が体験したあの911は、ただのテロではない。真実が知りたいなら、『×××-×××-×××』朝までにこの住所に従い、立体駐車場の三階にこい」とのこと。メールの内容は、明らかにあの事件を語っている。さすがにイタズラメールにしては個人的にかなり立ちが悪く、真堂は無知なゆえ、躍起になる感情に歯止めがかけられず、一人で乗り込んで来てしまった。

「なんなんだよ……いったい……」

メールの送り主を気がかりだが、真堂は妙な事に気が付いた。それは待ち合わせ場所に着いてから、車が一個も駐車していなかったことである。

当然、中には人がいる気配はまったくない。見知らぬ場所といえど、周囲には古びた様子はなく、今いるこの立体駐車場は廃棄された所でないことが分かる。

「はあ～、やっぱりなにかのいたずら——」

一瞬だけ不安が過るが、ただの偶然だと思いやるせない気持ちでボヤいた矢先——

「——真堂李玖くんだね」

「！」

さっきまで人の気配すら感じなかった駐車場だったが、突然真堂の真後ろに聞こえた一人の男の声によって状況は一変した。

そして訪ねてきた声の主を見る為に、真堂は瞬時に後ろを振り向く。

「もういちど聞くけど、真堂李玖くんだね」

真後ろに声をかけてきた男は再び真堂に訪ねた。男の見た目は30代前半で、顔つきは女性にも似た色白な肌をしている。まるでどこかの女形の歌舞伎俳優のようにも似ていた。

「なっ……！ なんなんですかいったい、いきなりこんなもの送り付けて！」

真堂は驚きを隠せない状態で、携帯電話の画面に映っている男が送り付けてきたメールを見せ付ける。

「ああすまない。三つの内、二つはいささか冗談が過ぎたようだ」

男は愛想を振りまくような笑みで、真堂を安心させようとした。

「僕の名前はジョニー、ジョニー・蓮＝マーキスだ。ジョニーと呼んでくれ」

「じゃあ……ジョニーさん。あなたが今日送ったこのメール内容は本当なんですか」

男はジョニー・蓮＝マークスと名乗った後、真堂は本題に切り替えようとした。

「ああ本当だ……。君は911についてどこまで知っているんだい」

「え？」

穏やかな口調で質問するジョニー。一方で真堂は困った表情を浮かばせた。

「それは……、犯人がイスラム原理主義のアルカイード。その首領がウサマ＝ビンラディンが引き起こした主犯だとか――」

「基本はそうだろうね……」

「きほん？」

「ああ基本911は、21世紀初頭に起こった最大のテロという事になっているが、これは表側の公表に過ぎない。実際にテロが起こった後として一番に浮かぶ思想は一つ『陰謀説』だ。君はこの陰謀説を信じているかい」

「……あんまり信じていませんけど……それがメールと陰謀説どう関係がるんですか？」

「それは……、911は実際に陰謀があったからこそ起きた事件だからだ」

「な……！」

ジョニーが告げた驚愕の真実に、真堂は911光景を脳裏に浮かび上がせたことで、とてつもない恐怖と悪寒を覚えた。

「じゃあ、あの事件は最初から仕組まれた事だったんですか」

「……そうだ……」

その言葉を聞いた真堂は心の中に大きな憎しみを芽生えさせる以前に、自分に言い聞かせるように感情を抑え込んだ。

「そんな……ことが……」

「落ち着きなさい。それによく考えてもみろ、アメリカは新世紀に入る以前は、一度も他国から国土を犯されたことがない列記とした超大国だ。そのアメリカが、飛行機の特攻なんて簡単に許すと思うのかい」

「でも人質が取られていたし――」

「あの事件はアメリカ市民にテロの驚異を知らしめる為の肅正に過ぎなかったんだ。単に有り得ないことが有り得た、ただそれだけのことなんだから」

ジョニーは無理にでも現実を分からせようと、真堂に真実を知らしめる。

「いったい……誰が……そんなこと……」

真堂は無知な自分を呪うかのように、ジョニーに何度も苦虫を放り込まれた様子で再び理由を聞く。

「僕が知っている限り、ある組織がテロリストに手引きした事が分かった」

「組織……？」

不意にいったその言葉に、真堂はある漢字二文字のキーワードに食付いた。

「そう、その組織は何百年もの間、歴史の裏に関わってきた組織だ」

「まさか……フリーメイソンとか言いませんよね……」

「いや、正確にはフリーメイソンと長く対立している組織。伝統には差があるが、同じ力、同じネットワークを形成していた強力な組織だ」

「第二のフリーメイソンのようなものですか？」

「まあ、そうともいうな。実はある人物からの命令で、僕は君達家族を監視していたんだ」

「えっ！」

ジョニーの突然の告白に真堂はどう応じようか戸惑った。

「監視って、どうして……というか……ある人物って！」

「君達家族の一人に精通した人物だ。とにかく僕はその人物にもう一つ頼まれたことがあってね。君をこの町から出すように言われたんだ。これを機に僕とっしょにこの町から出てくれ、もちろん家族いっしょだ」

「そんな突然言われても……！」

「今来れば君の知りたい事はなんでも手に入る。さあ、奴らに見つかる前に――」

「ちょっと待って、やつらって？」

「それは――」

それは一瞬の出来事だった――

第一話パート9・『夜襲は唐突に……』

ジョニーが真堂の質問に答えようとした直前。

突然向こうから、刃渡り1～2メートルで幅が広い刃物がジョニーの脇腹を貫いたのだ。

「――がはっ！」

「ジョニーさん！」

刺されたと同時に倒れ込み、真堂は慌ててジョニーに駆け寄る。

「いったいなにが！」

真堂が見たところ、刺されている部分からジョニーが着ているロングコートに血がにじみだしていることが分かる。

「なんだ……これは……いったい……どっからこんな物が――」

真堂が驚くのも無理はなかった。なぜならジョニーが刺されている物はただの刃物ではなく、RPG物のゲームでよく似る一本の大剣だった。

「――ま……さか……組織の手が……ここまでゴホッ！ 広がって……いたとはゴホッ！ ゴホッ！」

ジョニーは少しずつ吐血しながら言った台詞は、口内に香る血生臭い匂いに耐えているものだった。

「喋らないで！ 今救急車を――」

「ダメだ……」

「え？」

真堂が救急車に携帯で連絡しようとした。するとジョニーが傷口を押さえていた手で携帯電話を下げさせた。

「どうやら……僕の予想より……組織の手回しが……早かったらしい」

「そんな……じゃあ俺はどうすれば！」

「……逃げろ……」

「……え？」

本当だったら意識を保つのがやっとなのはずのジョニーだが、それでも喋り続け、真堂をなんとかしてもこの場から立ち去らせようと説得する。

「クッソお……。まさか……やつら……あれまで投入してきたとは……思わなかったなあ……」

「え……何を？」

「なんでもないこっちの話だ……。とにかく急いでここから逃げるんだ！ やつらに捕まったら……ただじゃすまされないぞ……！」

「そんな……」

ふと呟いたその言葉に食付き欠けるが、ことごとく流され、ジョニーは痛みを忘れたかのように真堂に警告する。

「で、でもジョニーさんは？」

「僕の方は大丈夫だ……」

「大丈夫って……、そんな体でどうやって逃げられるっていうんですか！」

かなり緊迫した状況でも、自分の身よりもジョニーの身を心配するかのよう真堂は怒鳴った

。

「そうだな……普通の人間だったら死んでいるだろうね……」

「……え？」

「いやそうじゃない……僕のことはどうでもいい……。必ずまた会いにくる……だから……今は逃げるんだ！」

ジョニーのその発言にうそ偽り感じられなかった為、未だに逃げずにいた真堂はよけいに動揺する。

「うっ……ち、ちきしょう！」

後ずさりした後ジョニーに背を向け、知りたいはずの情報を聞き逃した気持ちでいっぱいになった状態で、悔やみに悔やみ切れずに真堂はその場から走り去った。

(ちきしょう……やっとな……やっとなあの事件から解放されると思ったのに……)

幾多の迷いから復帰れないまま真堂は全速力で家に帰るのであった。

第一話パート10・『兄との朝食』

翌日。2004年4月16日。金曜日。朝――

あれから一睡もできずに昨日の夜の出来事が、まるでなにもなかったかのように真堂は朝を迎えた。朝食のパンを噛み締め、いつも見ているニュース番組(フ○テレビ)・め○ましテレビを見ながら、真堂は自ら機嫌の悪さを訴えるかのような顔つきでテレビを見つめる。

(眠い……)

「李玖……どうした？」

ただひとり真堂の様子に気付いて声をかけたのは、朝食を作った本人で家族の中で誰よりも頼りになる真堂の兄・真堂陽一の声だった。

「うん……、ちょっとね……」

「ちょっとっておまえ……顔青いぞ。それとクマもあるし、夜更かしでもしてたんじゃないか」
陽一はパンにバターを塗った後、そのまま口に運び、自分の弟を心配しながら食す。

「うう……」

兄の問いかけに真堂は答えられなかった。昨日の夜に起きた事をどう説明していいのか分からなかったからである。

「凶星だろう。昨日なにがあったかは知らないけど、あんまり心配かけるなよ」

「う……うん」

あまり昨日の事で兄に詮索されない事にホっとする真堂。

「なあ、李玖」

「ん……なに？」

さっきまで食べていたパンを皿に置いた後、陽一は真剣な眼差しで真堂を見つめ、ある事を問いかけた。

「今日……母さんの見舞いにいかないか？」

「え……」

真堂は口にパンを運ぶのを止め、困った表情でゆっくりとパンを皿に置いた。

「母さんの……見舞い……」

「ああそうだ。母さんおまえに会いたがっていたぞ」

「そ……そう」

兄の問いかけになにやら緊張した様子で応じる真堂。

「……」

「大丈夫だ……前みたいにおまえを拒絶したりなんてしないさ」

「……え……？」

不意に言った兄のその言葉はまるで、暗い闇の中に一筋の光が差し込むかのように真堂の不安を打ち消した。

「そ……そうだよ、昔とは違うもんね」

真堂が言う昔というのは、3年前。真堂の母・真堂優子は911で夫(創一)を亡くし、PTS

D(トラウマ)を発症した事で精神的に不安定になり、あの夫ですら生きて帰れなかった危機的状況から生き残った息子(李玖)を憎むと同時に、拒絶するようになった。

そのため真堂はこの3年間、母の見舞いに行くのは兄(陽一)・姉(智美)の二人しか来たことしかなかった。

だがその3年間、母の容態は精神的にも良くなり始めた事を知った陽一は、今度の母の見舞いの話しを持ち掛けてきたのだった。

「そうだ、まあ～そんなに無理して行く必要はないから、来たいか来たくないかは学校の帰りに俺に連絡してくれ」

「……うん。わかった」

兄の気遣いに照れながら応じる真堂。急いで朝食済ませ、一つの迷いに復帰れた事で真堂は爽やかな一声を兄にかける

兄は安心したのか学校に行く弟を満面の笑みで見送った後、朝食に使った食器を片づけ、自分が通っている大学へと向かうのであった。

第一話パート 1 1 ・ 『昼食後の相談・前編』

昼休み。学校の屋上で昼飯を食した後、真堂はあまり説得力には自信がなかった為に、獅郎に身振り手振りをしながら、昨日の出来事について全て話し始めた。

10分後。

「で……そのジョニー・蓮＝マークスって人が、911はただのテロないと、実際に仕組まれた事だと……」

「うん……」

「それで、ある人に頼まれておまえら家族を監視されてたと」

「……うん」

「で、その人が何者かが飛ばしたかのように大剣が刺さって、瀕死の状態とも関わらず、おまえに逃げろ言われ、おまえは逃げたと……そう言いたいんだな」

「う……うん」

「仮に……」

「……ん？」

「他の人にその事を喋ったとしたら……誰も信じねえだろうな」

「やっぱり……そうだよねえ」

獅郎に昨日の事について話したはいいが、あまり信じてはいないことを真堂は悟った。

「陰謀……フリーメイソンねえ」

「やっぱ……こんな話ししても信じてくれないよね」

「いや……信じよう」

「え……どうして」

「おまえが俺に嘘ついたってなんのメリットもないだろ。それに、おまえがそんなんで、嘘つくほどうまかねえだろうし」

話を信じた獅郎は思いやりが効いた言葉で、真堂にちょっとした安心感が持たせた。

「獅郎……」

「り～ぐ～ぐ～ん」

屋上の出入口から真堂達に、幽霊にも似た視線を送っている主の正体は石川岬だった。

「どうしたの石川さん！」

「ね……そく」

「……は？」

鉛のように重い瞼を持ち上げながら話す石川。眠気と疲労が同時に重なり、あまりろれつが回らない事が分かる。石川は話しをにかけている真堂には、目の下のクマが酷い為、顔が見えないように話しを進める。

「ねぶ……く——寝不足」

「ああ……そうなんだ。それで……なぜに寝不足を……」

「……」

真堂は寝不足の原因を恐る恐る聞こうとするが、石川は黙ったまま土下座の体制で体を沈める

。

「え！ あの……」

その体制にどんな思いが込められているのか分からないが、驚いた真堂はすぐに止めようとする。

「止めないで、今ものすごく申し訳ない気分なの！」

「いや意味分かんないから、ていうかどうしたのその顔」

「あの事を考えてたら……眠れなくて」

「あの事？」

「詳しくは獅郎くんに聞いてください」

「獅郎に？」

真堂は獅郎を細い目でみた。そしてギクリと冷や汗を流しながら、獅郎は真堂の視線を反らす

。

「……獅郎？」

「……」

「獅郎……俺の目を見て、怒らないから」

「……」

「獅郎……石川さんになにかいったの……」

ぼんやりとニヤついた顔で真堂は、獅郎に石川の意味不明な行動について問いかけた。

「……実は――」

石川は昨日の911の件について聞いて帰宅してから、真堂の過去を知ったことによって、これからどう接するのかを考える内にとんでもない罪悪感に溺れ始め、それから一睡もできずに明日を迎えたのだ。

「はあ～、なんで言うかな～」

獅郎は石川にいったことを全て話し、真堂は思わずため息が漏れる。

「すまん……」

「うう……」

「……あのね石川さん――」

いずればれると知っていてもこれ以上、他の人にばれるのは避けたいと感じた真堂は、今にも泣きそうな石川に911の件についてどれくらい知っているのかを聞いた。

「――そっかあ……杉山先生が……」

この真相を知った真堂。昨日の杉山が911の件について話していた事を思い出す。

「……まあ、石川さんの口の固さを見抜いてたからこそ言ったと思うけど……、先生……最終的に、石川さんが罪悪感に溺れることは予想はできなかったのだろうか……？」

真堂は渋い顔で自らの心の疑問を石川と獅郎の二人の前で述べた。

「あの……別に悪気があって聞いたんじゃないわね――」

「その辺はもう分かったからいいよ」

「ええっ、でも！」

みなまで言うなど、いわんばかりの様子で真堂は石川の質問をはぶく。

「たとえ……911の事を知ったとしても、俺は咎める気はないよ」

「え？」

自らの慈悲を表したような笑みを浮かべながら、真堂は倒れ込むような体制の石川に手を差しのべる。

「どうせ知られるのも時間の問題だし、なにより知ったところでそんなに罪悪感で落ち込む事ないよ」

「李玖……くん」

その手を差しのべられた時、屋上から優しく吹き込んだ風が、まるで心の芯まで当たるかのように、石川の中に宿ってた罪悪感が風と共に消え去った。

「あ……ありがとう。なんか……だいぶ楽になったかもしれない」

「それはよかった」

(なんだろう俺、かなり置いてかれたような気がする)

二人が親近感に浸ってる間、獅郎はどことない孤独感に感じ、自らの思っている疑問を心の中に呟いた。

「あっ、そういえばなにか話してなかった？ たしか……なにか仕組みられたとか、瀕死がどうかとか……」

「え、なに、聞いてたの」

(急に目の色が変わった！)

真堂の鋭い眼光に思わず肝が冷やす石川。

「はあ～……」

「あの～……」

911の次に真堂の秘密がばれたのはこれで二つ目となった。石川が戸惑っている中、また面倒な事になったと思わずため息を吐いた真堂。

「まあ……いいか」

「話していいのか？」

間が開いたところでやっと口を開いた獅郎は、真堂に昨日の出来事について石川に話すかどうか相談した。

「信じてくれないよりかはましだからさ」

「？」

「石川さん実は――」

真堂は石川の口の固さを信じて、昨日の出来事について全て話した。

「――監視！」

「しーっ！」

あまりにも信じられない内容に驚いた石川。思わず話し内容の一部を吐き出し、真堂は人差し指を唇の中心に当て黙るようにサインをだす。

「ああごめん……たしかに話そうにも、誰も信じてくれなさそうな内容だけど……私は信じるよ！」

「ありがとう石川さん。でも、さっき話した事はあんまり人に喋らないでね。石川さんも狙われる可能性があるから」

「分かった！ 実際に狙われた訳だからね……」

真堂の忠告に素直に応じた石川。いくつか昨日の出来事について疑問が残るが、真堂は石川に告白した事でちょっとした安心感が持てた。

「今でも信じられないよ。まさか911が……あの事件が最初っから仕組まれた事だったなんて」

「あんな大事が起こせるくらいだ。その組織はかなりデカイんだろうな」

「やっぱ獅郎もそう思う？」

あの事件を思い返しながら落ち込む真堂を見て、獅郎は慰めるかのように推測を説いた。

「……そういえば話と関係ないんだけど、崇妻くんの苗字ってなんて書くの？」

「あ？ 何だよ突然」

不意に言った石川のその言葉に、嫌な予感を感じた獅郎は少し困った表情を浮かべる。

「なんか気になって」

「……崇めるの崇と、人妻の妻って書くけど……」

教える義理はなかったが、911について詮索するよりかはましかと思った獅郎は面倒くさそうに応じる。

「ああ……やっぱり」

「なにがやっぱりなの石川さん」

石川が獅郎に関してなにか確信に近づいた事に気付いた真堂は、二人の会話に入ってきた。

「崇妻くん、『フォックスナイン』って会社知ってる？」

「……なんで！」

獅郎が驚くのも無理もない。なぜなら石川が言ったフォックスナインという用語は、ある業界人(政界人などなど)にしか知らない『崇妻財団』の名称だったからであった。

「フォックスナイン？ 獅郎それって」

「お袋の経営してる……会社……」

獅郎は冷や汗をかきながら応じる。

「たしかフォックスナインという名称は、九つの大企業が連携してできた会社だから、その名称が付けられたって聞くけど――」

「えっ！ 獅郎のお母さんってそんなにすごい会社を指揮ってるの！」

「ああ……」

獅郎の母親について知ってる以上の事を知っていた石川に対して、真堂は驚きが隠せなかった。一方獅郎は石川の母親に話を聞く度にだんだん冷や汗が増していった。

「でもちょっとまって、石川さんなんでそんなに詳しいの？」

「家のお父さんがその会社に務めていてね、家に帰る度にその働いてる会社について色々な情報(企業秘密以外)を教えてくるんだ」

「へ～そうなんだ……ん？ あれ？」

石川との会話中に真堂はある事に気付いた。それは、母親の会社について話していたら、思い出したくもない母親の微笑を浮かべる姿が頭の中によぎった為、気分が悪くなった獅郎はその場から立ち去っていたのだ。

「あれ……崇妻くんは？」

「獅郎は……やっぱり逃げたか……」

「逃げたってなにが？」

「いやぁ……その……獅郎はさあ、今お母さんと仲が悪くて、さっきみたいな話をすると急にどっか行っちゃうんだよ」

「そうなんだ……なんか悪い事しちゃったなあ」

悪気がなかったとはいえ、獅郎にとってはあまりにも気持ち的に辛い結果になる事を石川は理解した。

「でもなんで獅郎にあんな話しを振ったの？」

「それは、昨日おばあちゃんが先走って買った着物がね。崇妻くんのお母さんの会社が経営している店で買ったものだったんだ。その事でもしかしたらと思って話しを振ってみたんだ」

「そのおばあちゃんは何を先走ったんだい？」

「成人式」

「ああ、そりゃあずいぶん先走ったもんだね」

他愛の無い話しをするのはよかったが、昨日の出来事について話しが飛んだことに気がついた真堂は、すぐに本題をまとめようとした。

「とにかくさっき話した事は、誰にも話さないようにしといてね。まあ話したところで誰も信じないと思うけど……」

「でも監視されていたんでしょ。今でも……その……監視されてるんじゃない……」

石川は周囲に気を配る素振りを見せながら、真堂に不安げに訪ねる。

「いや、それはないと思う」

「えっ、なんで？」

自信に満ちた言葉で応じる真堂。その言葉に不安に感じた石川だがそのまま会話を続けた。

「あの瀕死の状態で俺を逃したところだと、多分どっかで傷を癒していると思うんだ。もっとも生きていられるかどうか分からないけど、とにかくあの傷で監視する暇なんてないと思うんだ」

「そう……李玖くんがそういうなら——」

「真堂っ！」

石川がそう理解すると、屋上の出入口から急いで張り上げた声が聞こえてきた。テンポの早い足音とともに大きくドアを叩き上げ、少しきつめ緑ジャージを着た美女は現れた。

「杉山先生！」

「ハア……ハア……ここにいたか真堂う……」

カゼで病院通いを理由に昼頃に学校に来た杉山は、職員室に入った方がいいが、自分の机に座ったとたん電話がかかってきていやいやでた。すると電話の相手先は警察だったことに驚き、真堂に関する連絡だった。その連絡内容を聞いて杉山は慌てて校内に真堂を探しに行き、今に至るのであった。

「どうしたんですか、そんなに急いで」

「ハア……真堂……ハア……落ち着いて……聞いてくれ……」

「なんですか」

「おまえの……兄ちゃんが——」

杉山の言葉に真堂は思わず耳を疑った。信じる信じないかの問題ではない、ただ認めたくなかったのだ。なぜなら真堂が聞いたのは、兄・真堂陽一が亡くなったことを告げていたからである。

。

あの時——真堂は父を亡くした事で人生を変化したように、今度は兄を亡くした事で真堂は新たな人生の一変と、試練の扉へと導くとは知るよしもなかったのだ——

一週間後――。

2004年4月23日。金曜日。夜――

真堂陽一の葬式は真堂李玖の誕生日に行われた。真堂は兄の葬式がまさか自分の誕生日に行われるとは思ってもよらなかった。そのことに皮肉を感じたが、そんなものは陽一を失った悲しみで一気に沈みかえった。

陽一の死因は焼死。大学へ行く途中、いつもの通学路に玉突き事故が起こった。近くにあった車が事故の影響でガソリンが引火し爆発する。それに陽一が巻き込まれ、しばらくして焼死体として発見された。警察の検視に出された時にあまりにも遺体の損傷がひどかった為、陽一だという特定は不可能だった。だが幸運にも私物の中に、遺体の首にかけてあったペアリングに名前が彫ってあった事に、真堂陽一だと特定ができた。

葬式に出席した人は崇妻獅郎、石川岬、杉山薫、クレア＝レイルフォード、兄の大学の同期、親戚一同(いところ込みで)、以上30人以上が出席したが、ゆいいつ欠席したのは真堂の母・真堂優子だった。

「…………ふー」

葬式は無事に終わり、出席した人達が励ましの言葉を交わしながら帰っていった事で、少し元気を取り戻した真堂は、気晴らしに外の空気を吸おうと一人で散歩をしていた。

「兄さん……なんで」

兄・陽一の突然の死についてまだ認め切れずに、真堂はある事を考え込んでいた。それは、なぜ兄が死ななければならなかったのか、そんな無力な自分に落胆する中で、なんとも腹が立ってしょうがなかった。

「……はあー」

『そ……ふい……け……て』

「！」

兄が死んだ事で真堂はこれからどうするのか考える前に、思わずため息を吐いた直後、突然頭の中に声が聞こえた。

『ソフィを……たのむ』

「あ……痛っ……なんで！」

なぜこんな見知らぬ道である現象が、頭痛と共に真堂は周囲を見回して見ると、適当に散歩しているうちにあの教会に行き着いたことに気付いた。

『俺は……人間じゃ……ないか……ら』

「あっ！ ああ……」

真堂は思わず顔を手の平で押さえる。教会である現象が起きて以来、二度と行かないと誓っていたので、真堂はその独特な緊張感に少し焦りを感じ始めた。

ピシッーーピシピシ

「――？」

不意に聞こえてきたなにかがひび割れるような音に、真堂は無理に誘われるかのように恐る恐る教会に入っていった。

『た……け……て』

「ん～なにも……ないよな……あれ？ そういえば頭痛が収まってる」

教会に入った事で聞こえてくる声に、真堂は急に痛みが引いていることに気付いた。

『た……す……て』

「暗くて良く見えないなあ……」

教会内は電灯と電球といったものはなく、光が内側に入りやすいように設計されている為、頼れるのは自然の光かろうソクの火でしか灯かりといえる物はなかった。

『た……け……た……す……け……たすけて！』

「ん！」

ピシッーーピシピシピシ……パリンッ！

「えっ？」

さっきまでボソボソと頭の中で、なにを言っているのか分からず気にもしなかったが、やっとまともな一言で聞こえたその矢先、急に前方からなにかが割れる音がした。そのことで真堂はその場で立ち止まった。

「今の音って――ん？」

暗闇の中で真堂の足下になにか転がってきた。それを拾い上げ、なにやら硬い物らしいが材質はなにか手探りで確認しようとする。

「なにかの……金属かな……ん？ 金属！」

真堂の脳裏にある光景がよぎった。その光景とは左右の床に並べてある横長椅子と前方中央に置かれている、古びた十字架に貼り付けにされたイエス・キリストのブロンズ像のことだった。

「あのブロンズ像の欠片か……ヤバいだろこれ」

その金属の出どころが分かったところで、最悪な場合弁償させられる危険を感じ、顔の欠けたイエス・キリストのブロンズ像を元に戻す為に、真堂は行動に移ろうとしたが――。

その時、さっきまで夜空にかかっていた雲が少しずつ消え、やがて満月が顔を出す。

月明かりは光を増し、教会内の灯かりとしてゆっくりと、顔の欠けたイエス・キリストのブロンズ像に光が差し込んでいった。

そこで真堂が見たものは――。

「なっ！　なんだ……これ……！」

月明かりに照らされた教会の中には、幻想的な空間を漂わせる。そんな中、思わず腰を抜かした真堂は、突然現れた目の前の現実が信じられなかった。

第一話パート 17・『解かれた封印』（終）

それは今日の前にある、イエス・キリストのブロンズ像の中に、とてつもない秘密が隠されていることが分かったから――

ただ、そこえ向かっただけなのに――

逃れることはできなかった――

現実という名の――

神の――

出会いに――

その信じられない秘密とは――イエス・キリストの顔が欠けたところに、人間の顔が見えていた。つまりは十字架に貼り付けにされたイエス・キリストのブロンズ像の中に、生身の人間が入っていたからである。

ピシ……ピシピシ……ピシピシピシ――ガシャーン！

「――わあ！」

しばらくたった後、イエス・キリストのブロンズ像に、徐々に入っていたヒビがすぐに浸蝕し始め、もろいガラス細工のように砕け散った。

それと同時にまるで長い牢獄に解放され、中に入ってた人間が倒れ込むように真堂の目の前に落ちていった。

「どわあっ！」

突然の出来事に混乱し始めた真堂は、すぐにこの状況にどう対応するべきか考えた。

「えーとえ〜と……よしっ！ まず生きているかどうか調べよう！」

真堂はさっきまで、ブロンズ像の中に入っていた人間の全身をよく見たところ。ボロボロの黒いスーツを着ていて、髪型は腰にまでとどく長い髪に、顔は二十代前後の青年。体格は長身で袖をめくり、異様なほどの筋肉質でかなりやせ細っている。

見た目からして、とても生きているとは言えなかったが、真堂がその青年の口元に手を飾してみると――

「……スーハー……スーハー」

驚いたことにちゃんと呼吸をしていた。

「い、生きてる！」

この時、真堂はこの青年との出会いによって、新たなる人生の一変と試練の扉が今開かれたの

であった。

その扉は己が真実にたどり着く為に開かれた